

ギュスターヴ・モロー作《天界を観想する大神パン》

— 諸宗教の調停者 —

金岡 直子 (大阪大学)

神話や聖書を主題とする絵画で知られるモローは、晩年に伝統的テーマから逸脱した諸神混淆的な作品群を制作している。それらの中にあって、最晩年の作品《天界を観想する大神パン》(1897年)は、その難解な図像ゆえに、これまでまとまった研究が特に乏しかった作品である。本発表では、複数の宗教・神話主題を重ね合わせるモローの手法に着目しつつ、同時代の宗教思想や神秘主義関連文献を手がかりに本作品の解釈を行い、彼が諸神混淆的な作品を手がけた意図とその歴史的意義を探る。

まず作品の主題を探るために、これまで注目されてこなかった、ヘルメス文書に関する19世紀のテキストをとりあげる。本作品に描かれた天界の光景は、星々に住まう精霊たちが悪しき魂を罰するというヘルメス文書の宇宙観に一致する。しかし本発表の目的はヘルメス文書との類似点のみを指摘することではない。モローがあくまでキリスト教の神を信仰し、晩年には異教を題材とした作品にもキリスト教的理念をこめていたことから推して、本作品にも聖書との関係が表れていると考えられる。具体的には、彼が関心を寄せていたエゼキエル書およびヨハネの黙示録に、ヘルメス文書と同じく、調停者による幻視と不敬虔な魂の懲罰というテーマを見出すことができる。モローが試みていたのは、各テキストの共通理念そのものの絵画化だったと考えられる。

次に、本作品の中心人物であり、モロー作品に頻出するモチーフである大神パンの役割を考察するため、19世紀にこの神に付与されていたイメージを探る。パンはギリシャ神話の神であるのみならず、全自然あるいは汎神論の象徴とされてきた。そればかりでなく、オルフェウス賛歌では星々の調停者であり、幻視に導かれるとされる。さらにモローは、パンに神と人をつなぐキリスト教の聖職者の役割を付与している。このようにヘルメス文書にも聖書にも属さないこの神は、さらなる神話や宗教の重ね合わせを可能にしている。以上のことを総合すると、本作品は、真の神の理想を追求するパンが星々の調停者として、また異教の聖ヨハネとして幻視に導かれ、不敬虔な魂に下される懲罰を眺めている場面であると解釈される。モローはヘルメス文書と聖書の記述を重ね合わせるのみならず、パンを利用することで、重層的な最後の審判図をつくりあげているのである。

本発表ではさらに、このような混淆主義的な作品が制作された背景として、従来の研究で看過されてきた同時代のコンテクストにも目を向ける。19世紀末は、シカゴ万国宗教会議の開催に顕著のように、様々な宗教の流入によって信仰のあり方の再考が迫られた時代であった。モローは同時代の宗教不安、それに伴って絵画界で流行した神秘主義に批判的な思いを抱いていた。彼の晩年の制作活動には、宗教の枠組みを超越した新たなキリスト教的絵画を当時の絵画界に提示しようという意図が見出されるのである。